

犬も相手にしないし 猫も匂いを嗅がない

金原 理

昨年10月17日から20日まで4日間、中国の天津師範大学で「中日比較文学国際シンポジウム」と言う国際会議が開かれた。このシンポジウムに招待を受けたので、前後の旅行日を含めて一週間、熊本を留守にした。

会議には50名ほどの出席があり、日本からは9名が参加した。天津郊外の、湖を借景に取り入れた瀟洒なホテルが会場として提供された。会議場にはゆったりとしたソファがコの字型に並べられ、銘々の前の小型のテーブルにはお茶の入った蓋つきの大きな湯飲みが用意され、それを楽しみながら会が進められた。私は「呉越同舟」と言う四字熟語のもとにもなっている越の国の戦術家、^{はんれい}范蠡—その伝記は中国の歴史書『史記』に詳しい—の生涯について触れ、それが日本の文学に取り入れられた場合、ある変質が起こることについて述べた。ただこのシンポジウムの報告は別の機会に譲るとして、ここでは滞在中に見聞した愉快な一事を披露しようと思う。

シンポジウムのプログラムは4日も午前中に組まれていて、午後は市内見学や遠方へのエクスカーションに当てられ、夜は大学主催のレセプションが行われたりした。この午後の見学の折、移動のバスの車窓から奇妙な看板が目飛び込んできた。それには猫の絵に「猫不聞」と描かれているのである。しかもこれを掲げた建物の入り口には「餐厅」と書いてある。餐厅とは日本で言えばレストランのことだが、このような看板



山査子売り

山査子の実を串に刺してアメで固めたものを、わらづとのようなものに刺して自転車の後に積んで売り歩く。

を出した店は一軒ならずあった。

3日目の午後は城内にある旧市街に出かけ、昔からの店を見て歩いたり買い物を楽しんだりして、夜には天津の老舗の集まっている、食堂街にある一軒の店に案内された。そのレストランの店名は「狗不理」と言う。ところがこの店の向かいを見て驚いた。「猫不聞」と言う看板がここにも掛かっているではないか。「狗」と言う字が日本語の「犬」にあたることに間もなく気がついたが、とすると今から入ろうとしているレストランではいったいどんな料理が食卓に供されるのかと、なんとなく異な気持ちになった。それで同行の中国の研究者におそろおそろ尋ねてみた。

「この『狗不理』とはどう言う意味ですか。」

「これですか。これは、犬も相手にしないと言うことですよ。」

「では、『猫不聞』は。」

「あれは、猫も匂いを嗅がないと言う意味です。料理屋の看板なのにおかしいですね、ハッ ハッ ハッ。」と、一笑に付されてしまった。

ともかくも百聞は一見にしかず、「狗不理」の店に入った。種々に手の混んだ前菜とともに卓上に並んだのは、肉饅頭であった。日本で店頭に並んでいるものよりいくぶん小振りである。この店では中に詰めるものを変えて、12種類卓上に並ぶと言う。じつに美味なのだが、これも旨い前菜を好い加減詰めこんで、ビールで大きくなったお腹にはとても12個も入らない。8個ほどで打ち止めにしてしまった。

「狗不理」も「猫不聞」と言う言葉も、このようにごくつまらない物、とるにたらない物と言うほどの意味であるが、それをもののみごと逆手にとって商標とする、そのあざやかさに舌を巻いてしまった。

ちなみに、「猫不聞」は水餃子の店である。これも一度は賞翫すべきであったが、4日という短い滞在期間ではその機会を作ることはできなかった。

帰国後、中国の留学生から、「狗不理」も「猫不聞」も天津から次第にチェーン店を全国に延ばしはじめていると、聞いた。

(きんばら ただし 文学部教授 比較文学)